

序説：モノ・コト・時間の人類学  
——物質文化の動態的研究——

後藤 明

## 1. 序論

近年「マテリアル・ターン」(e.g. Hicks 2010)が話題となり、物質文化ハンドブックと称する書物があいついで出版された(Tilley *et al.* eds. 2006; Hicks and Beaudry eds. 2010)。本共同研究もその刺激を受けて行われたものである。とくにこの共同研究開始と相前後して 2010 年に英米の歴史考古学者によって『物質文化研究ハンドブック』(Hicks and Beaudry eds. 2010)が編まれたことが特筆される。なぜこのような書物が人類学者や先史考古学者ではなく、歴史考古学者によって編まれたのか。この問いに答えることを本序文基調としたい。もとより英米を中心としても膨大な物質文化研究書を網羅するのは不可能であり、またそれ以上に物質文化の研究史を特定のパラダイムや理論的立場に整理して記述するのは困難であった。したがって本稿では、ときには国別の特徴、ときにはパラダイム的な特徴と展開、ときには特定研究者の歩みを追いながら、といった具合に、首尾一貫していないが、あくまで書きやすいやり方で物質文化研究の展開を展望した。そのためにときにはある研究者の特定の作品をやや詳しく紹介しながらその時代の特徴を浮き彫りにするような手法をとった。結果としてたとえば米国の 70 年代、民俗学の大御所 H. グラッシーとプロセス考古学の泰斗 L. ビンフォードを同じ土俵で論じたという意味で(cf. Ferguson 1977)、ある種斬新な記述になったのではないかと密かに思っている。

## 2. 英米の古典研究

### 2-1. 英国

人類の進化を漸移的な進化を論ずるとき E. タイラー(1975)やピットリバーズ(Lane-Fox Pitt-Rivers 1906)が使った文化進化の事例は「技術 technology」という概念に中心課題があった(例 飛び道具の進化)。一方英国の H. バルフォー(Balfour 1893)や A. ハッドン(Haddon 1895)は芸術(art)という概念を用いその分布や進化のメカニズムについて論じた。そのメカニズムとは自然物にモデルを持つ文様がデフォルメする過程の分析といった意味のメカニズムである。

とくにタイラーは博物館資料の型的分類(typology)と時間の序列化(seriation)の方法を用いて人類進化を論ずるべきとし、モノからの学習(object-lessons)を提唱した。マルクス主義の唯物史観に影響をうけた考古学者 G. チャイルド(Childe)の文明発生論は物的証拠の有効性を示した。おそらくそれら影響を受けてマンチェスター大学博物館にいた R. セイスは進化論的視点からの物質文化研究書『未開の芸術と工芸』(翻訳書は『未開民族の文化』、1942)を著し、物質文化および物質文化学という用語を用いている(Sayce 1933)。

ところが英国では 1920 年代以降、物質文化あるいは技術研究は B.マリノフスキーや A.ラドクリフ・ブラウンの登場とともに下火になっていた(cf. Hawkes 1954)。博物館資料などを用いて大風呂敷の人類進化論を行うよりも、フィールドワークに基づいて社会や文化の内的な構造を追究する手法が主流となったからである<sup>1</sup>。そして 20 世紀半ばに技術ではなく物質文化という用語が使われ始める。それは博物館研究者の一部が自らの領域が文化であるという主張する根拠(しかし一方それは彼らの逃げ場)となったが、同時に英国の社会人類学が博物館研究と決別してフィールド科学として歩み始めるという一種のネガティブな結果をもたらした(Hicks 2010: 36-37)。

考古学は独自の研究分野であるとする米国の W.テイラーの『考古学の研究』(Taylor 1964)に呼応して、ケンブリッジ大学の D.クラークは『分析的考古学』(Clarke 1968)において物質文化を独自のシステムとして捉える理論を提唱した。一方、人類学が社会構造を中心課題としていったのに対し技術から物質文化という範疇に表現を変えながら物質文化研究を博物館に押し込めていく動きが進行していた(Hicks 2010: 43)。

## 2-2. 米国人類学

植民地からの資料に多く依拠していた英国人類学における物質文化研究に対して、米国は国内にその資料の出所があったという点をもっとも異なっている。アメリカにおける物質文化研究の先駆者の一人はアメリカ国立博物館(U.S. National Museum)にいたオーティス・メイソン(Otis Mason)である(Fenton 1974)。彼は博物館にあるさまざまな道具の形態、構造、材質、用途、民族ごとの変異について次々とモノグラフを書いていった(e.g. Mason 1900)。中でも圧巻なのは数百頁にもおよぶ『土着のアメリカインディアン籠細工』(1902)であろう。一見すると彼の目は人間ではなく、物質文化とその形態や構造しか見ていないようにも思われるが、彼は 19 世紀末に出した著作『未開社会における女性の領分』においてモノ作りや生業活動に焦点をあて女性の役割を描き出すような斬新な視点も持っていた(1895)。

米国における古典的進化論者 R.モルガンは未開や野蛮などの時代を区分する基準に土器や金属器などの物質文化を年頭においていた。そして彼はイロコイ族の物質文化に関するモノグラフも残している(Tooker 1994)。人類史に普遍的な進化論的枠組みを適用するモルガンらに対し F.ボアズは詳細に文化の構成過程を分析すべきとしていた。その主著『プリミティヴアート』において芸術作品を作り上げる源泉として「かたちのみに基づく効果」と「かたちに結びついている観念に基づく効果」の両者のバランスのとれた分析手法を提唱している(ボアズ 2011: 18)。そして芸術製作における技術の役割とそれを支える身体技法の重要性を一貫して唱えた。

米国では A. クローバー(Kroeber)などが指導する文化要素の分布論も盛んであった<sup>2</sup>。そ

---

<sup>1</sup> マリノフスキーが物質文化に興味がなかったわけではないのは、彼のコレクションやマイルー民族誌や『西太平洋遠洋航海者』の未翻訳部分を読むとわかる(Norick 1976 および本論集の後藤論文参照)。ただし彼はそれらを社会制度との関連で興味をもったのであり、このあと社会的行為や社会構造に研究者の関心は移っていく。

<sup>2</sup> カリフォルニア大学の人類学関係の紀要(*Anthropological Records* 等)に掲載された CED(culture element distribution)研究がその例である。

の対象にはしばしば物質文化が当てられたが、いわゆる中心地モデルの適応について C. ウィスラー(Wissler 1926)と R. ディクソン(Dixon 1928)の論争があった。心理学の基礎を持つウィスラーは物質文化や風習におけるさまざまな分布パターンを分析して、文化要素の発生から伝播の過程を推測した。一方、ハーバード大学のピーボディ博物館の資料分析でも業績のあるディクソンは発見と発明、あるいは技術革新における平行現象などを指摘しウィスラーの単純な伝播モデルを批判した。また生業や運搬技術とあわせて利器の種類によって世界民族を位置づけたユニークな人類学教科書が E. チャップルと C. クーンによって書かれている(Chapple and Coon 1942)。

さて 1930 年代から 40 年代には盛んに北米の民族誌が書かれたがその中で特筆したいのが、イェール大学にいたコルネリウス・オスグッドのインガリック民族誌三部作である。冒頭で彼は文化を次のように定義する：文化とは人の精神に伝達可能でまたそれを意識できる、人間行動に関するすべての観念から成り立っている(Osgood 1940: 25)。そして三部作は三つの異なる側面に関する観念を扱うと言っている。(1). 人間の行動に直接由来する、心の外部にある対象に関する観念と同時に、それらの対象を製作するときに必要な人間行動に関する観念＝物質文化(material culture)；(2). 心の外部にある対象の製作に直接起因しない人間行動に関する観念＝社会文化(ibid.: social culture)(Osgood 1958)；(3) 人間行動(発話行動を除く)およびそのような人間行動に由来する対象を含まない観念に関する観念＝観念的文化(ideational culture)(Osgood 1959)。

上の三分法の中で物質文化についてオスグッドは定義の難点とフuzzyな対象についても論じている。たとえば畑は人間の行動が関与しているが物質文化なのか？畑には明らかに物質文化的要素、たとえば柵、小屋が含まれているが、畑そのもの、あるいはそれに伴う畝や用水路の溝はどうであろうか？さらに難しいのは煮魚、燻製魚などである。それらは明らかに人間の手の入ったモノではあるがオスグッドは 2. 社会文化に含めたい、と書いている(Osgood 1940: 26)。

そのあと彼はいくつかの項目を立てて物質文化の記述を行っている。特筆すべきなのは物質文化の製作について規範的な像を描くのではなく、その中の変異(variation)を強調している点である<sup>3</sup>。さらに記述とあわせて各道具がどのように使われるかを示す図が描かれるのも特徴である。たとえばナイフはどのように握って使うのか、などである。このように道具を使う身体技法と併せて機能を理解しようとするのは、A. ルロワ＝グーラン(Leroi-Gourhan)、A. オードリクール(Haudricourt)、F. シゴー(Sigaut)などフランス技術人類学の伝統と軌を一にする(後藤 2012)。

米国人類学における大御所の一人 C. クラックホーン夫妻ら(Kluckhohn *et al.* 1971)もナバホ族に関する優れた物質文化のモノグラフを残している。ナバホ族はインガリックと同系統の語族に属することもあり、クラックホーンらはオスグッドの物質文化誌を高く評価

<sup>3</sup> その既述項目は以下の通りである。

[1]. 外観(appearance)；[2]. 名称(name)；[3]. 製作(manufacture)3.1. 材質(material)、3.2. 組み立て(construction)、3.3. 変異(variation)、3.4. 製作場所(when made)、3.5. 製作時期(when made)、3.6. 製作者(maker)；[4]. 使用(use) 4.1. 用途(utility)、4.2. 使用方法(method of use)、4.3. 使用における変異(variations in use)、4.4. 使用場所(where used)、4.5. 使用時期(when used)、4.6. 使用者(user)、4.7. 使用寿命(length of life)、4.8. 所有権(ownership)。

している。しかし彼らの言う物質文化には生産物の製作や使用に関する行為と技術的な知識に加え、生産物の製作や使用および場所の使用を促進したり禁止したりする、聖俗両面の観念も加えている(Kluckhorn *et al.* 1971: 2)。オスグッドが社会文化ないし精神文化に含めたものの一部を物質文化に移行させているといえよう。

### 3. 70年代から80年代：民俗学と考古学の展開

#### 3-1. 73年ウィンタートウル・シンポジウムと米国の物質文化研究者群像

米国建国の地、デルウェア州にあるウィンタートウル(Winterthur)博物館は米国における物質文化およびフォークアート研究の中心地であった。ここにおいて米国建国 200 年の年に記念碑的なシンポジウムが開催された。このシンポジウムで提出された問題は、(1)いかに対象物を同定し描写するか、(2)誰がモノを作り初期アメリカの生活を作ったのか、(3)いかにそれらは範疇化され比較されるべきか、(4)「よりよい作り」という評価はいかにして可能か、(5)一般的文化的パタンはあるか、あるいは特定の場所に特有のパタンはあるか、(6) 作り手、製作者、使用者、購買者はだれ、どこ、いつ、なに、そしてなぜそうしたのか、という問いである(Martin and Garrison 1997)。

1975 年のシンポジウムは G.クインビー編『物質文化研究とアメリカ的生活』(Quimby 1978)、さらに 1977 年シンポジウムは『アメリカ的フォークアートに関する諸視点』(Quimby and Swank 1980)に結実している。そしてこの 70 年代半ばとはアメリカ民俗学あるいは物質文化研究でも時代を画すアメリカ研究の著作が次々と著される<sup>4</sup>。

ウィンタートウル博物館員の K.エームス(Ames)は特別展に対する解説書『必要性を越えて：民俗伝統におけるアート』(1977)の中でフォークアート(民俗芸術)、あるいはそれを作る職人集団に関する 5つの神話を指摘する。すなわちフォークアートというある種ノスタルジックな響きを持つ概念には 5つの偏見があるという(Ames 1977: 21)。それは (1) 個人性という神話(the myth of individuality)：フォークアートの担い手である職人は通常個人としてアートを作り、それを売る個人経営主である。その作品は職人ごとにユニークであるはずだ、という考え方；(2) 貧しいが幸せな職人の神話(the myth of the poor but happy artisan)：職人が一様に単調な仕事を繰り返すが幸せであった。これは余暇や趣味としてフォークアート作りをする現代人の感覚を投影した、研究者側の先入観である；(3) 手作りの神話(the myth of handicraft)：フォークアートは手作りであり、機械作りの作品はそうではないという思考方式である。しかし轆轤や電動のこぎりを含め多くのフォークアートが機械と無縁ではない；(4) 葛藤のない過去という神話(the myth of a conflict-free past)：フォークアートは過去の平和な、葛藤のない時代を自然主義的に表現したというイメージがあるが、しばしば職人は矛盾した時代状況を表現している；(5) 国家的独創という神話(the myth of national uniqueness)：自由で民主的であるというアメリカ文化の神髄をフォークアートに見るといふ態度である。しかし初期のアメリカの物質文化はヨーロッパの伝統か

<sup>4</sup> 米国ではアメリカ研究とは単にアメリカの歴史や文化の研究という意味ではなく、独立した学部(American Studies)として存在している。本稿でもそのような意味で使う。

ら変容を跡づけられるものが多い(e.g. Glassie 1968, 1973)<sup>5</sup>。

H.グラッシーは、フランス・アナル学派や「ニュー社会史」の影響をうけ、物質文化とは無識字層であった庶民の歴史を描く手段であるとして文献史学への批判を行った(Glassie 1968)。彼は、物質文化はそれを生み出す規則があり、また同時にコミュニケーションの一形態であるとした。すなわち物質文化は独自の語彙と文法を備えたテキストであり、「文化とは心の中のパタンで、文章あるいは家を生産するための能力である」(Glassie 1975: 17)という。彼は歴史建築の分析を通して基本的な部屋の大きさは連続的に増大ないし減少するのではなく、ヤード yard(約 90cm)を基本にキュービット cubit(中指から肘までの長さを原理とする 50cm 程度の単位)さらにスパン span(親指と小指の間の長さで約 23cm)という単位を加算ないし減算して決められたことを見いだした。つまりヤードの半分はキュービット、その半分はスパンという具合に空間が拡張される。さらに部屋を足す(水平移動)、壁を作る(三次元化)、屋根を付ける、部屋を連結したり窓を作ったりする(集積化と穿孔 *massing and piercing*)、そして二階を作る(垂直拡張)という一連の操作を加えて建築ができあがる。このような過程によって生み出される建築構造の変異をチョムスキーの生成文法をモデルとして数少ないルールの組み合わせで説明しようとした<sup>6</sup>。そして建築様式に見られる変化から建築が次第にプライベート空間を強調し装飾的要素は少なくなるという変化は、感情に対して理性が勝っていく過程、調和を重んじる思想の台頭と呼応すると推測している。それは米国独立後の混乱の中、協同的な生活感から個人重視の生活感への変化とも関係するものと読み解いている。

著作『手作りのものとその作り手』(Jones 1975)において M.ジョーンズは、個々人はその信念や価値観、技法や動機においてユニークであるとの前提のもと、モノの製作者個人に焦点をあてた。彼が対象としたのはたった一人の椅子職人であった。ジョーンズは、作り手はみなその行動が多様な要因に動機づけられた個人であるとする<sup>7</sup>。またモノは何かを成し遂げるための実践的な結果であると同時に目的そのものでもある。芸術的な創造過程を技術的なそれから切り離すことはできない(Jones 1975: vi-vii)。すなわちアートの大部分は道具であると同時に目的そのものであるので、アートは複合的な目的を持つ(Jones 1975: 203) <sup>8</sup>。そして作品を様式の一部、あるいはその源泉を過去の様式にだけ帰するのは動的なものを静的に、刹那的・一次的なものを恒久的なモノに、個人的・個性的なものを一般的

<sup>5</sup> たとえばアメリカ型斧がイギリス型斧から分離発達してくる過程の論文(Kulik 1997)などによく論じられている。

<sup>6</sup> グラッシーのこの建築の研究はアメリカ民俗学・物質文化研究の金字塔とされるが、その分析方法を他の研究者が理解し、適用された例はほとんどない、一種の名人芸であった(McDaniel 1978; Hicks and Horning 2006: 278)。

<sup>7</sup> ジョーンズは別途家の建て替えやリフォームの問題を論ずる論考でフォークという概念は名詞である必要はないと論じている。またもし行動が観察の中心であるなら、フォークとフォークロアの区別も必要ないであろうと論ずる(Jones 1980: 355)。これはある意味では「成ることは在ることよりも大事(Becoming is more important than being)」(Ames 1978: 98)という芸術家の言葉に通ずる。

<sup>8</sup> ジョーンズのこの議論はボアズなど「プリミティブアート」を作るプエブロインディアン  
の土器製作者やイヌイットの彫刻家は長い間白人との接触を体験し、その脈絡でさまざまな刺激を受けながら技法を継承している、という考えに影響を受けている(Jones 1975: 25)。

なモノに、きわめて複雑でときには矛盾がありさらにカオス的なモノを体系化し秩序立ててしまうことにつながる(Jones 1975: 213)。われわれが関心を向きたいのは彼らが作ったモノに関係しそれによって表現されている個人の経験、ときには矛盾し、あるいは刹那的に見える観念である(Jones 1975: 217)。

R.トレントの研究はジョーンズと対照的に一群の椅子そのものを分析の対象とした(Trent 1977)。グラッシーの歴史建築の分析と同様、ある時代の椅子の構造やプロポーシオンを多数比較することによって、それを生み出した技術伝統の動態、その変異と変容を描き出そうとするからである。対象は過去に属するのでグラッシーと同様、職人を観察したり聞き取りをしたりすることは不可能である。興味深いのは序文のなかでトレントは、この本の方法は考古学に近いと論じている点である。すなわち考古学者が過去の人工物の多様性や変異から何らかのパタンを見だし型式化し、型式の意味や型式間の関係を分析する手法が類似しているからである。

歴史考古学者 J.ディーツの行った物質文化の定義は幅広く、「物質文化とはわれわれが文化的に決まった行動ことで知られるによって変容させた自然環境の部分」を意味するという。それにはピンから宇宙船のような大小道具類、さらに人間の手の入った自然にも拡張される。たとえば様々な方法で切られた肉片、畝の付けられた畑も含まれる。鋤を牽かせる馬も人間が交配して生み出した個体であれば物質文化であり、行進やダンスをする人間の体も物質文化に含まれる。また池の水、風船をふくらませる空気、ネオンの中のネオンガスもしかりである。さらに規則に則って氣息を調節して発せられる言語も含まれるが、言語まで物質文化に含める利点は (1) 言語学で洗練された分析法を援用できる、(2) 物質文化を拡張することによって人間行動をより包括的に記述できる、この 2 点である。後者については E.ホール(Hall)などが提唱する距離学(proxemics)のように建築の中の間取りなどの中間の空間的關係を扱うことができるからである (Deetz 1977: 24-25)。

ディーツの主フィールドはマサチューセッツ付近であるが、彼が扱った対象は陶器、墓石、建築、そして手紙や財産目録などの文献資料と多岐に及ぶ。しかし彼は総じてヨーロッパからの移民が米国独立期にかけて、どのように自然との調和的な世界観とアメリカ的な個人主義的な価値観を形成していったかを論じている。そしてグラッシーがバージニアで確認したジョージア的な様相の進展がマサチューセッツ付近でも見られると指摘している。ただし『忘れられた小さなモノの中に』初版 (1977)においてディーツのまなざしはアフロアメリカンのような集団には向いておらず、その欠陥は第 2 版 (1996) において訂正されている。

### 3-2. プロセス考古学の挑戦

米国における考古学は人類学であると W.テイラーが唱えたのが米国近代考古学の曙であった(Taylor 1948)。新進化主義や文化生態学を理論的支柱にして 1960 年代、米国中西部を中心に勃興したプロセス考古学(ニューアーケオロジー)の旗手 L.ビンフォードも同じテーゼ「考古学は人類学である、でなければ何物でもない」という言葉を宣言した(Binford 1962)。すなわち考古学は人類学・民族学の従属的な分野ではないし、また歴史時代においては歴史学の従属的な分野でもないとしてである。考古学は考古学的資料・物質文化を駆使して他の分野が追従できない遠い過去、および長期的な人類進化や文化変容、文明発生などを議

論できる唯一の分野であると。ではプロセス考古学で物質文化研究はどのように進展したのだろうか？<sup>9</sup>

ビンフォード初期の論敵はフランスの考古学者 F. ボルド(Bordes)であった。ボルドはヨーロッパ後期旧石器の異なった石器組成(*assemblage*)を異なった人間集団あるいはエスニックグループを表すと解釈した。一方ビンフォードは狩猟採集民の民族誌などを元に、同じ集団でも季節や場所によって異なった行動をしようこと、したがって同じ集団でも活動内容によって異なった組成を残しようと主張した(1973)。たとえば活動内容の異なる母村と狩猟キャンプでは同じ人々でも異なった組成を残すであろう。また石器組成間に見られる特定型式の組み合わせが同じような共変異(*co-variation*)を見せるのであれば、それらは同一の刺激に対する反応であるという確率が高くなる<sup>10</sup>。

しかし石器の形態には大きな変異があり、特定の機能を規定できない以上、その変異は同一集団によって残された同じ用途を持った道具の変異なのか、異なった文化伝統を持つ集団の残した同じ用途を持つ道具の形態差なのか確定できない。ボルドは同じような型式比率を持つ組成がオープンな遺跡と洞穴遺跡という異なった脈絡に見いだしうることからビンフォードの解釈に疑問を投げかけた。

このような論争の結果ビンフォードは自説の補強のために『ヌナミット・エスノアーケオロジー』を発表した(1978)。彼がこの著作で扱ったのは人工物ではなく動物遺存体、つまり食われて廃棄された動物の骨である。それはビンフォード理論につきまとう「文化的形態」的要因の排除であった。イヌイットの人々は季節によって異なった狩猟方法を取り、また対象の動物も違う。さらに同じ動物でも季節によって異なった解体法や処理(例 保存法)を適応する。したがって季節的に異なった場所には異なった動物遺存体組成が残されるであろうと考えた。

本稿の論旨上興味深いのは人工物の変位の解釈を議論する上でのひとつの究極形態、すなわち物質「文化」を排除した議論をビンフォードが目指した点である。彼の言葉を使うと骨は文化からフリーな(*culture-free*)分類体系なのである。したがって動物遺存体組成に見られる頻度の変異は食糧資源を使うための戦略の変異としてのみ解釈できると主張した(Binford 1978: 11-12)。

ビンフォードのこのような姿勢はプロセス考古学のひとつの大きな柱となる思考と直結する。それは「機能」と「スタイル」の峻別という傾向である。たとえば R.ダネルは機能

<sup>9</sup> ビンフォードは物質文化(考古学的人工物)は技術的(*technomic*)、社会技術的(*socio-technomic*)、観念技術的(*ideo-technomic*)と三分割されるとしている。すべてに *technomic* と付いているのは、ある道具が社会的な目的ないし観念的(例 儀礼具)であっても、それらを製作する技術が存在するという意味である(Binford 1962)。

<sup>10</sup> ビンフォードとボルドらの論争の中心はフランスのムスチエ文化である。ムスチエ文化の石器組成は異なった組成に異なった型式の石器が含まれるのではなく、共通の石器型式の割合が異なるという特徴を持つ。ビンフォードがそこで採った方法は多変量解析の因子分析である。石器組成の中に含まれる各種型式の頻度から型式間の相関係数を計算し、それに因子分析(*factor analysis*)を施すと算出される因子負荷によって石器型式がいくつかのグループに分けられる。その内容を見て、あるグループは狩猟具のセット、あるグループは解体具セットなどと推測するわけである。さらに因子負荷から各組成に因子得点が算出できそれによって二次元ないし三次元平面に位置づけられた各組成は、組成内で卓越するセットの内容によって狩猟キャンプ、あるいは母村的組成などと推測できるわけである。

とはダーウィニズム的な自然淘汰に関与する側面、スタイルは淘汰に無関係な中立的な側面と定義した(Dunnell 1978)。考古学者 P.カーチはスタイル的側面にも適応行動に意味があると看做す。たとえばポリネシアのマルケサス諸島の初期の釣針組成に大きな変異が見られ、後に変異が少なくなるのは、新しい環境で人類が試行錯誤した結果であると解釈したので(Kirch 1980)。

ビンフォードやダネルはスタイルをどちらかという議論の本道から離れた「ノイズ」的側面とするのに対し、後述の M. ウォープスト(Wobst)以来のスタイル論はスタイルに何らかの意味を見いだそうとする点で異なる。さらにフランスの技術人類学(e.g. Lemonnier 1992)や米国の考古学者 R.サケット(Sackett)なども機能とスタイルを分けること自体不可能だし無意味だとするが(1982, 1986)、一部の米国考古学者はこのような枠組みで議論を続けている(Hurt and Rakita 2001)。

### 3-3. 構造主義的考古学からポストプロセス考古学へ

80年代初頭、米国のプロセス考古学に対し英国ケンブリッジ大学系統の考古学者が反旗を翻した。その理論的基盤は C.レヴィ＝ストロースの構造人類学やその元となった構造言語学や記号論、そしてマルクス主義的な実践論であった<sup>11</sup>。

I.ホダーはビンフォードらが文化を適応手段と見、機能主義的な文化観に基づいたのに対して、人工物は文化的コードを背景に持つ記号であるとする。社会学者 A. ギデンス流に言えば、プロセス考古学が目指したのはシステムとしての文化であり、ホダーらは構造と構造化を追求しようとしたといえよう。興味深いことにホダーらは米国のプロセス考古学には手厳しいが、グラッシーやディーツのような民俗学者ないし歴史考古学者には構造主義的考古学の先駆者として高い評価を与える。またホダーらのプロセス考古学批判は物質文化の象徴的側面だけではなく、プロセス考古学が個人とその実践を無視し文化をシステムとしてしか捉えない点、また社会を調和的に捉える傾向もあげられる(Hodder 1982a)。ならば上に紹介したように職人は種々の矛盾の中でモノ作りをする実践者であるとした M. ジョーンズ、あるいは調和に満ちた時代の神話を暴いた K.エームスらの業績も評価すべきだったと思うが、なぜか参照されていない。

さてプロセス考古学者は自然環境への合理的な適応戦略と人間行動そして物的証拠(遺物・遺跡)に規則的な関係を見いだそうとしたのに対し、ホダーは脈絡(context)の重要性を唱え、自らの立場を脈絡的考古学(contextual archaeology)とも称している。そして物質文化変異と脈絡との関係を探るためにケニアで民族考古学的調査を実施した。従来土器文様などは民族ないし言語集団の分布と相関すると考えられてきたが、ホダーはさまざまな物質文化が異なったメカニズムで動くことを見いだした。たとえば権威の象徴である鉄製の槍は民族集団を超えて長老に所有される傾向がある。またこの地方では嫁は夫の集団に同化すべしというイデオロギーが強いので女性の移動は女の作る土器には見えにくい。女性た

<sup>11</sup> レヴィ＝ストロースの影響と物質文化、とくに衣装の分析に構造言語学的手法を導入した先駆者であるチェコの民俗学者ボガトウイロフらの業績によって物質文化を文字テキストをモデルとした分析が盛んであった。これに対しテキストのもつ線状性(lineality)は物質文化には見られないという批判(Chippindale 1992)をはじめ再考がなされている(McCracken 1990a; Eversmann *et al.* 1997)。

ちは嫁入り先の技法を習得させられる傾向が強いからだ。しかしあまり目立たない装身具などにおいては個性を表現する自由度があるので、かつての出身集団の痕跡が見いだせる。また同じ民族境界でも友好的な関係を持つ場合と経済的・軍事的な緊張が高いときとでは、物質文化に現れる境界性は異なる。またしばしば考古学者は墓地の規模は権力の程度を反映すると仮定するが、もし死後の世界では平等であるという宗教観念が支配的ならば、むしろ墓制には身分差は隠されるかもしれない。このように、意味深く構造化された(meaningfully structured)物質文化とそのパターンや変異はさまざまな社会的、経済的、宗教的脈絡によって解釈しなければならない(Hodder ed. 1982, 1989)。さらにホダーらは構造主義や記号論の厳密な適応による物質文化の分析からさらに歴史的・文化的脈絡を重視する解釈考古学(interpretive archaeology)や資料を解釈する自己の相対化、さらに「誰が歴史を語る権利があるのか」といった問いにみられる批判的考古学(critical archaeology)ないし自省的考古学(reflective archaeology)に向かっていった。

さてホダーらの主張にも関わらず先史考古学においては原理的に認知や象徴的側面の議論がどの程度可能かどうかは意見が別れる。しかし文献の利用によってそれがあがる程度可能な歴史考古学者たちは積極的に過去の観念やイデオロギーを追究していた。ホダーらも高く評価する米国の M.レオーネ(Leone)がその一人である(1982)。

レオーネはアメリカ東部の都市で米国初期の歴史景観を残すと言われるアナポリスの研究において、1690年代から1770年代にかけて貧富の差が増大していく過程を分析している。その中で18世紀初頭における時計、科学器具(例 顕微鏡、望遠鏡)、楽器の流入を富裕層の拡大を意味するだけでなく、時間、視覚、聴覚を通して自然を観察しまた秩序立てていく思考方式の導入であると解釈した。またこれらの器具や道具を使うための作法や規則の発達など直接物質には現れない側面の変化をもたらし、全体としてジョージア的秩序の概念と結びつくという(Leone 1988: 242)。望遠鏡や測量機は都市計画に利用され、このような科学的器具を通して投影された景観が世界観というより、それを疑表象(misrepresent)した秩序＝イデオロギーを形成した。また同じ頃急増する食事用具は労働者階級の間にも食事のマナーが浸透し、同時にドイツの言う資本主義の根本である個人主義の一般化と呼応する動きとなった。つまり労働者は職場での食事と家庭での食事を区別するようになり、工場や大学では時計やベルによって管理された時間の中で生きるようになった(e.g. Leone 1984)。

#### 4. 80～90年代における動向の理論的背景

##### 4-1. 文化・社会人類学の動き

英国で社会人類学の台頭の影で物質文化研究が博物館学に矮小化されてきた状況に変化が見られた。ここで重要なのは C.レヴィ＝ストロースの著作『構造人類学』(1963)の英訳である<sup>12</sup>。ホダーらが評価する米国のグラッシーやドイツらも早くからレヴィ＝ストロースを参照している。この著作は構造言語学的な分析手法を社会構造や神話のみならず物質

<sup>12</sup> これは同じフランスのルロワ＝グーランの著作が1993年になって初めて英訳された事情と対照的である。この本の翻訳は英米の研究動向に影響を与えた(後藤 2012)。

文化にも適応した点で重要だが、続く『仮面の道』(1982)の翻訳も英米圏の研究者に物質文化の構造主義的分析手法の成果として評価されている。このような流れの中ではもはや「技術」ではなく、「物質文化」が研究対象とされるようになった<sup>13</sup>。1977年には英米の考古学者によく参照される P.ブルデュの『実践理論概観』の英訳(Bourdieu 1977)もあり、英国の社会学者 A.ギデンスの構造化理論と相まって、実践理論やハビトゥスという概念が考古学や物質文化研究の文献に登場してくる。これらの著作によって物質文化あるいはその物質的効果は社会構造や文化的イデオロギーとの関連で論じられるようになる。

この時期の書物で物質文化研究者に参照される本に A.アパデュライによる商品のライフサイクル論がある(Appadurai ed. 1986)。この本の中では商品はどうのように誕生したのか、また商品はそもそも資本主義経済とともに出現すると言えるのか、さらにひとつの商品が生産から流通そして消費に至る過程でさまざまな社会的脈絡を通り抜けていく中で「商品性」に変化はないか、などが問われたのである。問題なのは何が商品かではなく、モノを商品にする状況、商品的状況(commodity situation)とは何なのかである(Appadurai 1986; Kopytoff 1986)。商品的脈絡とは、あらゆるモノの社会的な生活においてその交換可能性が社会的に関与的な特徴である状況と定義される。そのように定義された商品的状況は(1)モノの社会生活における商品的時期 (commodity phase)、(2)商品候補性(commodity candidacy)、および(3)商品的脈絡(commodity context)から分析されなくてはならない(Appadurai 1986: 13)。

また参照が多いのが N.トマスの「絡められたモノ論」である(Thomas 1991)。彼はオセアニア内部だけでもモノの交換には様々なパターンが見られることに注目し、伝統的とされる婚資や流入した西欧起源の(かつての)商品が異なった様態でオセアニア社会の中で流通される現象を分析した。そして物質文化は特定の文化内で決して固定的なアイデンティティをもたず、またその再命名、再脈絡化は色々な形で動機づけられるとした(Thomas 1991: 187)。

さて上述のように米国の歴史考古学者や物質文化研究者は 60 年代からレヴィ＝ストロースの参照を行い、先史考古学あるいはプロセス考古学者とは異なった方向性の研究を行ってきた。この間人類学でも注目されるいくつかの文献がある。

M.リチャードソンの編の論集『人間の鏡：人間の物質的および空間的イメージ』(Richardson 1974)は物質文化の象徴論、職人論、さらに E.ホール(Hall)の「隠れた次元」論的な空間論に関する論文が混在しているが、W.フェントンによる手頃なアメリカ物質文化研究史に関する論考も含まれている(Fenton 1974)。一方、H.レクトマンと R.メリル編の論集『物質文化：技術のスタイル、組織および動態』(Lechtman and Merrill 1977)は物質文化スタイルを、技術的行為に関するあらゆる行動的特性に拡張し、後述するフランスのシェーン・オペラトワール論との接近を示している(Lechtman 1977; Gosselain *et al.* 2010: 5)。また W.オズワルトは著作『食料獲得技術の人類学的分析』(日本語訳は『食料獲得の技術誌』)において、「技術単位(techno-unit)」という概念を導入して世界の狩猟採集民の技術の複雑化について分析を行った(Oswalt 1976)。これ以外では英国同様、人類学の枠

---

<sup>13</sup> そして物質文化研究の近傍で影響を与えたのはフランスの構造主義的マルクス主義の泰斗 M.ゴドリエの『観念と物質』(1986)、またアメリカの M.サーリンズの『人類学と文化記号論』[原著は『文化と実践理性』、1976](1987)などである。

内では物質文化研究は低調になったように見える。例外は B. レイノルズと M. ストットによる『物質人類学(Material Anthropology)』(Reynolds and Stott 1987)であったが、この分野名称は定着しなかった。一方、カナダでは論集『物質的世界に生きる』(Pocius 1991)が出されカナダにおける民俗学と人類学(北米先住民の研究)を一堂に介する試みが行われた。またアメリカのスミソニアン研究所からは博物館学を中心とした論集『モノから学ぶ：物質文化研究の方法と理論』なども出されていた(Kingery 1996)。

一方、民俗学者による物質文化研究は連綿として続いていた。T. シュレレスは『アメリカにおける物質文化研究』というアンソロジーを編みこの分野におけるアメリカの伝統を集大成している(Schlereth 1982)。また同時にその論集の序文はアメリカにおける物質文化研究を9つのパラダイムに整理して論じるような労作である(後藤 2012b)。モノグラフでは上述のジョーンズなどの流れをくむ S. ブローナーは「モノを掴まえる」、「モノに入る」、「モノを作る」、「モノを消費する」といった人間がモノに働きかける様態にそって物質文化との関係を論ずる試みを行っている(Bronner 1986)。またブローナーは『アメリカ的物質文化とフォークライフ』という論集をこの前後に編んでいる(Bronner 1985)。この論集ではグラッシーやジョーンズらが議論を戦わせている。

さてこの間を総括する意味で重要なのはウィンタートウル博物館において再び行われた90年シンポジウムである。A. マーチン(Martin)と J. ギャリソン(Garrison)は1975年に同博物館で行われた記念碑的なシンポジウム(上述)から1990年代に至る米国物質文化研究の概観を行っている(Martin and Garrison 1997)。この論考「研究分野を形作る：物質文化に関する学際的な視点」は1993年に同博物館において行われた物質文化に関するシンポジウムの論集『アメリカ物質文化：研究分野を形作る』(Martin and Garrison eds. 1997)の序論的な位置づけの論考である。

マーチンとギャリソンの論考では1975年以降、物質文化研究の潮流は3つの流れに大別されて論じられている。それは、(1) 人類学、(2) 社会史、および(3) 美術史である。90年代の共通の認識として物質文化は一種のテクストとして解釈されるべきであるので、人間行動の脈絡的な理解が必要であるとされる(Martin and Garrison 1993: 13)。すなわち実践の中でいかに意味が創出されるかということが問題であり、その意味も社会関係が生起する脈絡に依存している。ここで米国の民俗学者はホッダーらの象徴考古学を参照し、物質文化が文化の反映であるという考え方を退ける(逆にホッダーらがディーツやグラッシーを参照していたことを想起)。物質文化が文化的行為を仲介し制約するところにおいて果たす役割を考えれば、それが固定的で普遍的であることはない。物質文化は常に人間行為者によって創造されるが、その創造行動は信仰、場面、観念、物質、選択肢の知識などに関連する。物質文化は習得され共有された文化的規則と同時に地域的で偶然的な機会と制約に応答する行為者の生産物である(Martin and Garrison 1993: 15)。

さてこのような潮流の交差の結果産み出された90年代の物質文化の理論的立場ないし問題設定の特徴は次のように要約できる：(1) 自己意識ないし自らの立ち位置へのまなざしと、アプリアリな仮定の反省。具体的には今まで関心がもたれなかった従属的集団、奴隷、下層階級、少数民族、さらに人種、階級、ジェンダー、エスニシティへの関心。(2) 文化史学者によって無視されてきた対象と解釈の主観性の問題。文化的パターンとは行動の自由を制約するイデオロギー的、経済的、政治的、社会的制約であるなら、変異とはそのような文

化的規範に対する抵抗の可能性があり、変異そのものを説明する必要性が生まれる。(3) 研究者はデータ（証拠）、方法および変化する視点の三つ巴の一部であるという認識と、歴史的研究における物質と観念の同等性の認識である。

この論集のなかにも文化的な諸現象は一種の器用仕事であり、種々の文化要素を寄せ集めて範疇化する仕事であるという視点、意味は固定しておらず文化的脈絡において付加されるという視点、消費文化、他の民族集団との接触、クレオール化や文化変容と物質文化への視点、意図的にモノを抵抗やアイデンティティのサインとして使う排除や差別に脅かされる人々への視点などが意図されている。すなわち 90 年代に入り人々がモノを意味ある関係に構成する深い構造的なパタンの存在に気づき、研究者は特定の歴史的な状況における人間エージェントとしての役割に興味を持つようになったと言える(Martin and Garrison 1993: 18-20; Dobres 2000; Dobres and Robb ed. 2000; Dobres and Robb 2005; Joyce and Lopiparo 2005)。

#### 4-2. 物質文化スタイル論と装飾論

プロセス考古学において乖離する傾向のあった技術論とスタイル論、あるいはスタイルの側面の軽視に対して再考がなされてくる。そのひとつのきっかけは構造主義的考古学の議論であるが、プロセス考古学の延長上でも自ら現世民族の調査を行い、物質文化と人間行動を探ろうとする民族考古学が盛んになっている。民族考古学は民族誌的情報を考古学資料の解釈に役立てようとする方法であると狭義には理解されるが、結果として物質文化を巡る多くの新たな知見を生み出す物質文化研究の有力な分野と見なすべきであろう(Hicks 2010: 51-55)。

スタイル現象に関する様々なモデルの目指すところは、(1)スタイルあるいは物質文化的形態を具体的な社会文化的現象と関連させようとする努力、および(2)スタイルを生み出す要因の多様性の認識、この2点である(Conkey and Hastorf 1990; Conkey 2006)。代表的なモデルとしては社会的交流モデル(social interaction model)<sup>14</sup>、情報交換モデル(information exchange model)では、構造論的・象徴論的モデル(structural/symbolic model)などがあげられる。また P. ウィスナー(Wiessner)による紋章的(emblemic)スタイルと主張的(assertive)スタイルの区別(1983,1984, 1989)、旧石器研究者の J.サケット(Sackett)による同機能的(isochrestic)スタイル(Sackett 1982,1986)などの諸モデルである(後藤 1997)。

これら種々のスタイル的モデルは、物質文化スタイルと人間行動の間の様々な側面や次元に対応し、人間の心理や認知構造の異なった次元に対応するだろう。すなわちこれらの様々なモデルは、スタイルと称される物質的現象の多様性を意味するのであろう<sup>15</sup>。C. カ

<sup>14</sup> 例えば地域間の土器の模様に共通性があった場合、二地域は婚姻や交易による交流が盛んであり、逆に共通性がない場合、交流が少なかったと考える立場である。もし女性が土器を作り、その社会が母系制で妻方居住をする社会であるとする。そこでは土器の製作技術は母から娘へと伝えられ、ムラや地域間では土器文様などの交換現象は見られない。一方、夫方居住が行われるなら、女性が外部から婚入してくるので、模様の交換が起こりやすいと考えられる。この方法は W.ロングエーカー(Longacre)が先駆けであるが、ロングエーカー自身、1980 年代にはこの方法には無理があることを認め、かつての自分の理論は「もう弁護(defend)しない」と語っていた(1984 年 8 月、ロングエーカー氏のご教示による)。

<sup>15</sup> スタイルの創出はすべて意図的ないし意識的(紋章的スタイルの多くはそうであろう)でもなく、逆にすべて無意識的・習得的(同機能的変異の多くはそうであろう)でもない。ひ

一(Carr)の表現を借りると、我々がとるべき戦略は分析すべき形態的属性の範囲を広げ、問題とすべき原因的過程(causal process)と制約(constraint)の範囲を広げることが必要である(Carr 1995)。土器ならば装飾の部分にだけスタイルを見るのではなく、技術的部分、たとえば胎土の成分に見る水や混和剤の入れ方・混ぜ方にまでスタイルを拡大して考える、ということである。また属性の構成とその決定因(determinants)について階層的な観点をとる必要がある。すなわち、もっとも深層の無意識のレベルから、個人の感情や意志のレベル、そして社会ないし文化的に動機づけられる社会心理的レベルにいたるまで、物質文化のスタイルがどこから生み出されてくるかである。このようにスタイルも重層的な認識が必要であるし、製作過程におけるさまざまな意志決定(decision-making)も階層的に行われる<sup>16</sup>。

物質文化の装飾分析において重要なのは装飾の形態や文様の構造を分析する方法である。北米先住民の土器文様分析における対称性分析(symmetry analysis)の伝統を受け継ぐ D. ウォッシュバーン(Washburn)は数学的分析手法を取り込み、土器、織物、籠など異なった素材に適用して対称性分析をした(1983; Washburn and Crowe 1988)。そして彼女は多くの物質文化に見られる対称性は人間の認知構造と深く関わると主張する。また対称性のような形態の認知に使われる属性と形態の再生産に使われる属性の違い、形態の類似の認定に使われる属性と形態の分類(差異化)に使われる属性の違い、という重要な事項に関する指摘をおこなっている。

これから明らかになったのは複雑に見える装飾も基本的な原理の応用と繰り返しから成立してくることである。これはすでにできあがった構造の背景に潜む原理の探求であり、じっさいの製作工程の分析ではないが、シェーン・オペラトワール論的分析と通ずるものがある<sup>17</sup>。その端緒は F.ボアズであり、その弟子で土器研究をさらに推進したのが R.ブンツェル(Bunzel)である。ブンツェルは 1900 年の初頭、製作者に聞き取りが可能であった時代に、スミソニアン研究所やアメリカ自然史博物館にあった土器資料について製作者の聞き取りを加味した先駆的な調査を行った。彼女は粘土という可塑性の高い物質から作られる土器は、籠網や石器とくらべ自由度が高いのに、なぜ製作者はある一定の規範の中で作るのかという先進的な問いをもっていた(Bunzel 1929: 2)。

---

とつの道具ないし人工物にも、意図的に作られる部分があれば、無意識に作られる部分もある。われわれが手にする「スタイル的変異」はその総体である。

<sup>16</sup> しかしその場合、人工物のデザインと属性の計画に関わる意志決定の階層の中での属性の序列と、人工物を製作するときにとられる段階の序列を区別しなくてはならない(Carr 1995:173)。両者を区別するのは、人工物を作ることを計画するとき、各属性についてどのような順序で計画を進めるかということと、じっさいに作る時、どの属性(部分)から製作を始めるかは異なりうるからである。

<sup>17</sup> この意味では建築の多様な構造を比較的単純な法則の組み合わせで分析していったヘンリ・グラッシーの記念碑的な業績とも通ずるであろう(Glassie 1973)。グラッシーが分析したのは建築を生み出す原理の序列であり、実際にとられた工程ではないからである。ウォッシュバーンとグラッシーの共通性はハーディンの用語を使えば実際の製作過程である encoding を対象としたのではなく、すでにできあがった対象を作るための基本的な原理の総体、つまり特定の社会や製作集団に共有されている製作原理を decoding した研究といえよう。原理的な序列と実際の工程の関係はカーのモデルでもとりあげられているのと対比すべきであろう(後藤 2012)。

ブンツェルを批判的に継承した M. ハーディンは土器文様の構造を分析するのではなく、文様が施文された序列を観察することによってデザインの構造を説明しようとした。施文過程において製作者はさまざまな選択肢が与えられるので装飾は装飾序列における問題解決(problem-solving)のプロセスである(Hardin 1983: 9-12)。また同じ伝統に属する製作者が創出する文様の変異から製作者の遂行(performance)の背景にある情報の構成について推論することが必要であると主張する(1983:12)。また文様の施文過程(encoding process)と製作者自身による文様の説明を意味する解読過程(decoding sequence)は施文過程との比較検討も行われた(Hardin 1979)。このような分析の結果、装飾とは多元的な構成レベルと多くの構造的な選択肢から成り立ち、社会的、文化的、経済的脈絡などと同時に関わっていることがわかる(Harding 1984: 575)。デザインをどのように捉えるかは製作集団にとって一様ではない。土器の類似性を問われたときもっとも注目するのはデザインの構成である集団もあれば(例 中米のタラスカン地方)、土器文様全体を類似性判断の根拠にする(例北米のズニ族)集団もある。これは土器の器形や文様そのものの構造にも由来する(Hardin 1983; Hardin and Mills 2000)。

#### 4-3. シェーン・オペラトワール論と技術選択・技術境界論

技術論あるいは人工物の製作に関し、最近フランスの研究者の提唱するシェーン・オペラトワール(chaine opératoire)、すなわち動作連鎖ないし操作連鎖の概念が注目されている。これは物質文化を製作する過程、すなわち「製作工程」(英訳は operational sequence)に注目することによって技術の動態(dynamics)の理解を目指すものである。この分析視座については別途詳述しているが(後藤 2011, 2012a)、この立場は技術的行為を単に物質的ないし技能的レベルだけにとどめず、人間の運動能力から、社会文化システム、そして象徴システムや認知構造まで視野を広げて技術を位置づけ、さらに技術の社会文化的システムへの埋め込みを問おうとする。このシェーン・オペラトワールのモデルはアメリカにおいても、H.レクトマン(Lechtman)のいう「技術の中のスタイル」という考え方に通ずるものである(Gosselain *et al.* 2010)。技術的スタイル(technological style)とは物質的パタンそのものではなく、物的パタンを生み出すプロセスなのである(Lechtman 1977)。

P.ルモニエによると道具デザインに対する観念は既に存在しているデザインに依存する。ハイテクとされる飛行機のデザインですら物質文化特有の構造的必要性に埋め込まれた必要性を超えている(Lemonnier 1989, 1992: 66-77)。したがって技術の社会的選択を同定するためには同じモノを作るシステムの社会間比較が必要である(e.g. Lemonnier ed. 1993)。技術的属性や技術的過程がある技術システムに現れないのは、知識の欠如よりも選択の結果である場合が多く、技術的選択は社会的遂行として理解されるべきである(Lemonnier 1992: 51-56)。次にシェーン・オペラトワール論を民族考古学的調査に応用し、社会に埋め込まれた技術を開拓している研究を見てみよう。

アフリカ北部に存在する様々な土器製作の各工程における技法や操作(例 粘土の処理、成形、焼成、装飾等)の分布は一致しない。技術システムは一貫しておらず、製品、製作技法、信仰や物質に対する態度は異なった起源のもの混在でありうる。また変わりやすい部分と保守的な部分が共存する。たとえば成形法は身体技法に依存し習得に時間がかかるため技法は偶発的な接触ではなく、長期的に親密な関係の中で習得されるので変化に抗す

るように見える。しかし成形法といっても比較的容易に習得できる型取り法(molding)には当てはまらない。すなわち技術伝達は技法自体の性格にも依存し、身体技法と親密な習得環境に特徴づけられる成形法も、一方で技法の特性、一方で社会的な圧力など技術習得の脈絡に応じて伝達可能性も異なってくる(Dietler and Herbich 1998)。したがって技術研究の視野には集団の上下関係、生計的補完関係、接触の程度と人間移動の動態など技術伝達に関係する様々な社会的メカニズムが含まれる。また各工程に関わる身体技法、言語的・非言語的省察の度合い、初心者の技法習得の脈絡、そして生産を取り巻く種々の社会体制などの理解があって初めて技術選択と技術伝達に迫ることができる。このように技術的行動は社会的生産物である。技法は特定の学習過程の結果であり社会的に獲得された性向なのである (Gosselain 1998, 2000, 2001, 2008; Gosselain *et al.* 2010)。

## 5. 現代考古学

### 5-1. 行動考古学と考古学の拡張

プロセス考古学の延長で今日的な意味を持ったのは M. シッファーらによる行動考古学や遺跡形成論であった。70 年代半ばに行動考古学(behavioral archaeology)を唱えたシッファーは、人間行動が目的に沿って空間的にどのように分節化されるかを探る C 変形(C[ultural]-transformation)と道具のライフサイクル論を軸に、廃棄後の人工物の形態的変形あるいは組成としての変形探る N 変形(N[atural]-transformation)の両者から、一つの遺跡を形成する局地的な組成(asssemblage)の成立を探ろうとした(Schiffer 1976, 1987)。その成立要因として目的を持った行動(例 トウモロコシの調理)を成り立たせる行動連鎖(behavioral chain)を想定した。シッファーは行動連鎖とは線的なものではなく各段階で選択肢があり、また道具の再利用や転用のような複雑なループが存在することを指摘している。そして最終的に人工物が考古学的脈絡(archaeological context)に入ってから変形を受けるプロセスを分析し、遺跡から出る考古組成の変異を説明ないし予測しようとした。この人工物のライフサイクル論はアパデュライらの商品のライスサイクル論から理論的刺激を受けた考古学者や人類学者に再評価されている。

シッファーらはシェーン・オペラトワール論との類似をみとめているが、ルモニエが技術はまず社会的生産物であり、技術的選択は文化特有の論理でなされると言うところに難を付ける(Skibo and Schiffer 2008: 11-15)。シッファーは近年あらためて人類学的技術研究を唱え(Schiffer ed. 1992, 2001)、自らはラジオや電気自動車といった商品の開発の研究を積極的に進めている。その中で遂行的マトリックス(performance matrix)なる概念を唱え、技術的選択を決定する様々な要因を絶対的および相対的順位で評価して技術的变化を説明しようとする(Schiffer 1991)。マトリックスの中には技術的効率だけではなく、社会的、象徴的あるいは儀礼的効率まで含め徹底的に合理的な説明を試みる。たとえば儀礼的効率とはある儀礼を行うというパフォーマンスが集団の結束を固めるという具合に、機能主義的な説明が加えられる(Skibo and Schiffer 2008: 89-105)。

またシッファーらアリゾナ大学系の人間は民族考古学の教育ないし実習もかねて現代物質文化の調査を精力的に進めている。アリゾナ大学グループが中心となって『現在物質文化研究』が出されたが(Gould and Schiffer 1981)、この本のサブタイトルは「われわれの考

古学(archaeology of us)であった。すなわち現代社会の物質的側面を考古学的手法で追究しようというものである。これはさらに考古学の拡張論(expanded archaeology)、すなわち考古学的分析を今まで扱われなかった時代＝現代まで拡張するという姿勢に直結する(Skibo *et al.* eds. 1995)。

さらにシッフアーらも加わり、英米考古学者の共作による『現代的過去の諸考古学』という一見矛盾したタイトルの本が出版された (Buchli and Lucas eds. 2001)。現代的過去(contemporary past)とは現代に近い過去という意味もあるが、現代を考古学的手法で解明するというニュアンスも同時に持っている。さらに考古学は複数形(archaeologies)であることも近年の顕著な特徴である(例 Tarlow and West 1999 ; また 2009 年ダブリンの世界考古学会議 WAC [=World Archaeology Congress]におけるシンポジウムなどを見よ)。「過去を所有するのは誰か(Who owns the past?)」という問いのように、立場によって様々な過去が描けうという構築主義的な思想を表しているのである。

## 5-2. 現代物質文化論：消費論とマテリアリティ論

物質文化において注目されてきたのは生産と流通であり、消費の側面についてはポトラッチのような特有の現象を除くと、日常的そして現代的な消費活動はどちらかというと軽視されてきた。しかしその常識を打ち破ったのが現代のゴミを扱った、アリゾナ大学のガベージ・プロジェクトである(Rathje and Murphy 1992)<sup>18</sup>。このプロジェクトは統計や人々の言説に現れる廃棄行動と実際に廃棄物から推測される廃棄パターンとの食い違いを明らかにし、現代社会における消費行動の意味づけについて新たな光を当てた(e.g. Dietler 2010)。

米国では歴史考古学において消費が重要な着目点となっていた(Spencer-Wood 1987)。英国でも 1990 年代にケンブリッジ大学からロンドン大学に移った D.ミラー(Miller)と C.ティレイ(Tilley)らによって唱えられた現代物質文化研究は、時間や空間のサイズに限定されないヒトとモノとの関係を解析することを目指している(Miller 1987; Tilley 1990)。物質文化研究は目的ではなく手段として捉えられ、消費をはじめ(Miller 1995)、景観、建築と家、遺産、そして芸術と視覚文化などが中心的テーマとなっている。

消費研究は特定の社会的脈絡における価値、儉約、供犠などの観点から消費行動を分析する。物質の消費は高度に個人的な社会的関係を構築するのにきわめて重要である(McCracken 1990)。景観(landscape)は開放的で論争的で多義的な対象である。たとえば地方的ないし国家的景観に関して記憶と忘却、そしてツーリズムとアイデンティティ・ポリティクスの交渉などに関する相反する見解が提示される。さらに建築と家の研究は人間の身体性とイデオロギーに向かい、日常的な社会实践の場所としての分析がなされている。また歴史遺産については、遺跡が何を意味するかだけではなく、過去を保存しながら現代に生きる意味が追究される。そこではモノや遺産と文化的記憶や忘却とがどのように関連するのか考察される。視覚芸術においては A.ジェル(Gell)の分散したエージェンシー論などが参照され、なぜ視覚芸術が疑似エージェントになるのか、あるいは規定された社会的脈絡の中でどのように意図性の感覚(senses of intentionality)を表現しているかが問題となる。

---

<sup>18</sup> アメリカ流現代物質文化研究には英国のミラーらはモノへのフェティシズムが依然として支配的であると批判的であった(Miller 1987: 143)。

芸術は美的な視点ではなく対象と人との関係性に焦点が当てられる(Cochran and Beaudry 2006: 197-9)。

ここで物質文化研究はモノそのものではなく、モノと人間との関係に中心を置き、日常的すぎるため、あるいはイデオロギーの影響によって見えにくくなっている社会生活に光をあてている。またモノ生産の過程が生産者個人のアイデンティティ形成に果たす能動的な役割、また生産者の社会的文化的アイデンティティのより広い脈絡を分析する。インフォーマントが何を言うかあるいは何をするかよりも、彼らの物質的な関与(モノを使っているか)に世界に働きかけているかの方に視点を移し、社会生活において能動的なエージェントとしてのモノを見いだすことを目指す。物質文化は疑似的エージェントであり世界における経験を形成する潜在力を持つ。それは、物質文化はそれゆえイデオロギーを強化し、家族の構造を形成し、身体感覚の中で行為する物質および隠喩として存在するからであるとされる(Cochran and Beaudry 2006: 195-196)。

さらに参照したいのは考古学者 C.レンフルーらが唱える「物質的関与(material engagement theory)」論である(Renfrew 2001, 2005)。物質的関与論においては、人間が世界と係わる際に認知的と同時に物理的あるいは身体的な側面を同時に適応しているというとらえ方が提起される。この考え方には心と物質、心と肉体あるいは認知と物的世界という二分法を克服する目的がある(Renfrew 2005: 159)。さらにこの理論は人間の存在状況の身体化を強調する。人間は限界と可能性をもった身体なしには存在しえない。またその身体化はわれわれ社会が発展させ使ってきた知識、経験と物質文化にそって変化する(Renfrew 2005: 159-160)。そして人間個人とコミュニティーが行為を通して世界と関わるプロセスは同時に物質的現実と知的な要素を併せ持つ。心が実践に先立つのでも、概念が物的シンボルに先立つのでもない。シンボルはいつも既存の概念の「物質化」ないし反映なのではない(Renfrew 2005: 160)。

換言すると物質的関与論の共通認識は、モノと世界の物質性はハビトゥスを創造する上で決定的な役割を持つと仮定する。この物質性が身体化された性向を産みだし、その性向は偶発性と創造性を許容し、同時にエージェンシーを歴史と既存原理に埋め込まれた集合的社会的論理にそって導くことである(DeMarrais *et al.* eds. 2004)。物質的関与論はさらに記憶(memory)の問題と拡張された心(extended mind)論(Malafouris and Renfrew 2010)、物質的エージェンシー(material agency)論(e.g. Boivin 2008; Knappett and Malarouris 2008)、あるいはマテリアリティ論がとくに考古学者の間で盛んになっている(e.g. Miller 1998, 2005, 2010; DeMarrais *et al.* 2004; Knappett 2005)。ただしミラーやティレイの先導するマテリアリティ論には人類学者 T.インゴルドが手厳しい批判を行っている(Ingold 2011)<sup>19</sup>。

また物質的関与論を唱えるレンフルーらによる注目すべき動きはモダンアートへの接近である。アーティストが世界を切り取り表現する営みに、発掘など考古学者の実践行為、さらに人類が本質的に世界と関わるやり方についてのヒントを見だし、考古学者あるいは人類学者とアーティストがコラボレーションをした展示などを行う試みである(Renfrew

<sup>19</sup> インゴルド、ミラー、ティレイらは *Archaeological Dialogues* 誌、14 巻 1 号(2007)において論文やコメントの応答において議論を行っている。

2003; Renfrew, Gosden and DeMarrais 2004)。事実ヨーロッパのいくつかの民族学博物館の新展示はこのような路線で企画されている<sup>20</sup>。

### 5-3. 英米歴史考古学者の邂逅

本稿で見てきたように、米国では歴史考古学はアメリカ研究という枠内にあったが、人類学や社会史の影響もあり、80年代から90年代にかけてエスニシティ(Schuyler 1980)、食生活(Spencer-Wood 1987)、ジェンダー、社会的地位、消費のような人類学的な問題設定が行われる素地があった。またプロセス考古学の影響で長期的な文化進化や適応といった問題にもさらされていた。先住民文化や奴隷や移民という異文化の存在、さらにそれとの接触変容といった問題にも直面していた(ディーツの『忘れられた小さなモノの中に』の初版と第2版を比較せよ)。このような米国の歴史考古学は独自の物質文化科学へ発展していく方向性が含まれていた。たとえば M. ボードリーらの唱える文献考古学(Documentary Archaeology)である<sup>21</sup>。これは文献資料(税金の書類や財産目録などを含む)を独自のリアリティを持つ「テキスト」と捉え、その内部構造を探ったのちに、もう一つの「テキスト」である物質文化システム(遺跡・遺構・遺物)との対応関係を探るという方法論である(Beaudry 1988; Wilkie 2006)。

北米の歴史考古学は西洋人が北米大陸に移住した以降の時代を扱う分野であるので明確なスタート地点が規定できるという特徴があった。一方、英国では歴史考古学という分野は厳密には存在せず、西暦16世紀頃までを扱う中世考古学という分野があったが、産業考古学のような分野をのぞきポスト中世考古学は貧弱であった(Tarlow and West ed. 1999)。英国では被差別民や奴隷のような社会の表面に出てこない対象へのまなざしが弱く、プロセス、ポストプロセス考古学や人類学理論の洗礼も受けていなかった。しかしディーツやグラッシーに対する評価から、米国歴史考古学への興味が喚起され、同時に先史考古学あるいは人類学的問題設定への関心も高まった。80年代以降のポストプロセス考古学の流れが英国で起こり、その論者であったミラー(Miller)やティレイ(Tilley)が現代の消費文化や景観論を行うことによって、「中世」と「現代」の間の時間に対する興味が掘り起こされ、そのような状況下で米英の歴史考古学の出会いが促進された(West 1999)。

いま米英の歴史考古学者は問題意識を共有化しようとしている。そこで主張されるのは、既成のパターンに合わない状況を暴き出し、その中で人々が物質的なモノの生産、消費、収集、誇示あるいは使用によって本当に成し遂げようとしていたことへの理解に接近することである。そのためには高度な分析手法と解釈学をもっていなくてはならないが、歴史考古学者は考古学と人類学的な物質文化研究が統合されたときに人間と物質的世界の関係に光を当て解釈する潜在能力にやっと気づいたばかりである(Cochran and Beaudry 2006: 203-204)。それは民族考古学の進展によってモノから言い得ることと言えないこと、そしてモノに依拠するなら何が適切な問いなのかという意識が覚醒されたのだと考える。

90年代以降このようにして歴史考古学者の意識覚醒が起こり、その結果の一つとして『歴

<sup>20</sup> たとえばドイツのフランクフルト(Deliss 2011)、ケルンあるいはスイスのバーゼルの民族学博物館の新展示を見よ。

<sup>21</sup> 通常、文献考古学というと、文献の利用できる時代の考古学、すなわち歴史考古学を意味する。

史考古学ハンドブック』(Hicks and Beaudry eds. 2006)を共編した英米の歴史考古学者によって今度は『物質文化ハンドブック』(Hicks and Beaudry 2010)が編まれたと筆者は結論する。多数の聲がせめぎ合う状況で認知や象徴性の側面を文献研究や聞き取り調査で扱うことのできる歴史考古学は(Leone 1982; cf. Renfrew and Zubrow 1994)、文化人類学、民俗学、そして先史考古学における理論と方法論を物質文化研究において戦わせ、あるいは接合させ、その有効性を検証するための理想的なアリーナとなったのである(Buchli and Lucas 2001; Yentsch and Beaudry 2001; Buchli 2004; Hicks and Beaudry ed. 2006; Cochran and Beaudry 2006)。

## 6. おわりに

終わりにあたり本論を要約しよう。

- (1) 英国では世界的な民族資料コレクションから人類進化を論ずるような大風呂敷の人類学の視点で物質文化が行われていたが機能主義台頭以降、物質文化研究は下火になった。米国では自国の民族資料を中心とした進化や伝播論の証拠として物質文化が使われていた。その中心の一人 F.ボアズの流れは細流として米国人類学には存在したが、一方で民俗学やアメリカ研究において物質文化研究の流れは連綿として続いていた。
- (2) 考古学の独自性を唱えて台頭した米国のプロセス考古学では必ずしも物質文化研究そのものを進展させなかった。しかしその中でもボアズの流れをくむ装飾・スタイル論はフランスのシェーン・オペラトワール論へ、また行動考古学は現代消費文明論という今日的な問題意識へと連なる可能性を保っていた。英国のポストプロセス考古学はレヴィ＝ストロース、ブルデュ、マルクスらの理論を軸にし、一方で米国の歴史考古学や民俗学を一部参照しているが、筆者の見る限りその視野は限定的であった。
- (3) 80 から 90 年代、米国の民俗学やアメリカ研究や歴史考古学には、プロセスおよびポストプロセス考古学・批判的ないし自省的考古学を参照して、社会の構造変化、階級やジェンダーあるいは複数の考古学という意識が生まれていった。このような状況下で歴史考古学にはさまざまな隣接分野の理論を検証し、モノからコトへ迫るための土壌が形成されていた。
- (4) フランスのシェーン・オペラトワール論、英国では現代考古学を標榜する D.ミラーや C.ティレイらによる消費文明論、マテリアリティ論、エージェンシー論、考古学者 R.レンフルーらの物質的関与論、さらに拡張された心論や記憶装置としての物質文化の問題は、米国系の研究者を巻き込み、近過去(recent past)や現在を対象にさまざまな物質文化解釈のための視座が試されているのが現状である。

さて『物質文化ハンドブック』(Tilley *et al.* eds. 2006)の序文において物質文化研究の 10 の視点が提起されている(Tilley 2006: 4) :

1. 物質として存在しいかなる人間の行為や介入からも独立しているモノ(例 石、山、動物、木)。
2. 人間によって作られたモノ : 人工物(artifact)

3. モノが作られる物質や構成要素：その起源、集合、組み合わせ。
4. モノが生産される技法、これらのモノが動かされ交換され消費される様式。
5. 人間や主体によって所有される意識的観念や意図にモノが関係する様式。
6. モノが思考の無意識の構造に関係し、個人の意識を越えた気がつかない状況、慣習、あるいは経験に影響する様式。
7. モノ、あるいは物質文化一般が人間の文化や社会に関係するやりかた：モノが人間であり他の人たちと生きることの統合的な部分であること。
8. モノが価値体系、宇宙観、信念、感情、より広範囲には個人および社会的アイデンティティと関係する様態。
9. モノが歴史や伝統、個人および集団的記憶、社会の静態と動態、そして空間、場所、概念およびローカリティとの関係しかたの様態。
10. モノと人間の身体との関係のしかた：身体そのものがいろいろなやり方で動き、現象し、誇示する文化的および感覚的モノであり、モノが身体の可能性を生産され、制約し、拡張しあるいは制限するやりかたといかに関係するか。

本論集に寄せられた論考を上記の項目によって整理してみよう。それはあくまで各論考を読む視点である。各論考は上記 10 項目のどれかに分類できるわけではなく、むしろ複数の項目に同時に関わっていることこそ重要であるからである。

まず本論集には宗教的なモニュメントを対象にした論考が 4 本寄せられている。

渡部論文はアンデス地域の神殿、とくにその更新（立て替え）の過程と家族社会という社会的枠組みとの関連を探ったものである。それは神殿のようなモニュメントが従来いわれてきたように社会統合や宇宙観と関連しているだけではなく、神殿を建て替えるという行為自体が人々を無意識のレベルにおいてある社会集団に帰属させるという作用を持っていることを示唆する。

坂井はアフリカのモスク建築の変遷の意味を問うている。とくに建築物を人間の精神生活と物質的生活との相互浸透としてとらえようとしている。そして分析の結果モスク建築を可能にする技術はモノの素材性や物理的条件によって可能性と限界をもつが、同時に特定社会の中での歴史的な蓄積によってのみ実行可能になるものである。精神の領域にある信仰が、物質的領域にある建築において具現化されることによって、技術固有の物質的条件と技術の歴史的・社会的存在様態が両者の出会いと交わりを支えると結論する。

ムンシ論文は長崎のいわゆる隠れキリシタンによって信仰されてきた枯松神社を取り上げている。隠れキリシタンの研究は少なくないが、本論文はとくに神社の社殿、ご神木、付随する墓地や墓石、あるいは岩という複合体に着目し、それらが隠匿された信仰とどのように関わったかという意味で、顕在化が常態である通常の物質文化、とくに記憶やモニュメント性の議論のちょうど鏡像的側面を開拓したものといえる。

サガヤラージ論文はインドにおけるヒンドゥーやキリスト教寺院における建築や宗教具のようないわゆる人工物だけではなく、それに関連する宗教的パフォーマンスやディスプレイを総体的にモノとして捉えることを提唱する。そしてそれによって宗教実践における主体性と客体性の弁証法的関係を軸に、インドにおけるキリスト教の *inculturation* (外来文

化を現地社会が主体的に取り込んでいく現象)の諸相を宗教実践の空間や教会建築などの具体的分析によって描き出している。

次にアートや図像に関わる論考が2本続いている。

吉田論文は物質文化や芸術と社会的な記憶との関連を探っている。その分析対象はバリ人作家の描く絵画であるが、その解釈を巡っては、西欧美術的な思考にもとづきバリ絵画を非政治的とするマクレイの分析に疑問を呈する。むしろバリ芸術が作り出される実際の脈絡はシミュラクル的であり、同時に語り得ないモノを語っているという新たな解釈を提示する。

リースラント論文は過去50年におよぶ日本の暴走族という社会現象について、その組織的変遷や日本人の抱くイメージについて論じている。その手法は暴走族を取り上げた種々の雑誌記事、DVDなどの映像、暴走族のオートバイの装飾や衣装スタイルを総体的に暴走族と主にマスコミとの関係性の中で創出されるモノとして捉えることによって近年変容してきた暴走族の日本社会におけるポジションを描き出そうとしている。

さらに石原論文はコーヒーの起源地とされるエチオピアにおいてコーヒー豆がもつモノとしての意味を問うている。序論で言及した人間が働きかけるモノを物質文化ととらえるアメリカの歴史考古学者・J. ディーツの定義に従えばコーヒー豆も物質文化とされるが、石原論考はコーヒーを入れる行為自体の象徴性、コーヒーの起源神話が物質文化や技術の起源譚となっている点、今日のエチオピアにおいてコーヒーが文化資源を巡る政治ゲームの対象となっている点などを指摘し、物質文化研究の新たな地平を開拓している。

また後藤論文は主に博物館に収蔵展示されているオセアニアのカヌー研究の再検討を行うことで、技術や民具研究の分析法や視座の限界について論ずる。その方法は既存の博物館資料と現地調査の統合によって、すでに素材や構造が急速に変化している航海カヌーのような項目でも今日的な分析対象になりうることを示している。

最後の木田・山崎論考は人類学者と芸術家の協同による一つのアートプロジェクト背景を論じたものである。そこでの議論は対象を分析するときに暗黙に仮定されている心と物質、主体と客体、認知世界と物質世界を対比させる二元論的思考を超えるために、考古学者のレンフルーの物質的関与論の理論を軸に、人が世界と関わる時の、認知的側面と身体的側面が同時に活用される「エンゲージメント」と呼ぶべきプロセスを通して見ようとする。人類学のサイドからすると博物館の民族学展示への新たな試みともとらえられる。

## 参考文献

Ames, Kenneth L.

1977 *Beyond Necessity: Art in the Folk Tradition*, A Winterthur Book. The Winterthur Museum.

Appadurai, A. (ed.)

1986 *The Social Life of Things*, Cambridge: Cambridge University Press.

Appadurai, A.

1986 Introduction. In: A. Appadurai (ed.), *The Social Life of Things*, Cambridge:

Cambridge University Press, pp. 3-63.

Balfour, Henry

1893 *The Evolution of Decorative Art*, New York: MacMillan and Co..

Beaudry, Mary (ed.)

1988 *Documentary Archaeology in the New World*, Cambridge: Cambridge University Press.

Binford, Lewis R.

1962 Archaeology as anthropology. *American Antiquity* 28: 217-225.

1973 Interassemblage variability – the Mousterian and the ‘functional’ argument. In C. Renfrew (ed.), *The Explanation of Culture Change: Models in Prehistory*, Gloucester: Duckworth, pp. 227-254.

1978 *Nunamiut Ethnoarchaeology*, New York: Academic Press.

Boas, Franz

1927 *Primitive Art*, Oslo: H. Aschehoug. (F.ボアズ『プリミティヴアート』、大村敬一訳、言叢社、2011)

Boivin, Nicole

2008 *Material Cultures, Material Mind*, Cambridge: Cambridge University Press.

Bourdieu, Pierre

1977 *Outline of a Theory of Practice*, Cambridge University Press: Cambridge.

Bronner, Simon J. (ed.)

1985 *American Material Culture and Folklife: A Prologue and Dialogue*, Ann Arbor: UMI Press.

Bronner, Simon J.

1986 *Grasping Things: Folk Material Culture and Mass Society in America*, Lexington: The University Press of Kentucky.

Buchli, Victgor and Gavin Lucas (eds.)

2001 *Arcaheologies of the Contemporary Past*, London: Routledge.

Buchli, Victgor and Gavin Lucas

2001 The absent present: archaeologies of the contemporary past. In: V. Buchli and G. Lucas (eds.), *Archaeologies of the Contemporary Past*, London: Routledge, pp. 3-18.

Buchli, Victgor

2004 Material culture: current problems. In: L. Meskell and R.W. Preucel (eds.), *A Companion to Social Archaeology*, London: Blackwell, pp. 179-194.

Bunzel, Ruth L.

1929 *The Pueblo Potter: A Study of Creative Imagination in Primitive Art*, Toronto: General Publishing.

Carr, Christopher

1995 A unified middle-range theory of artifact design. In: C. Carr and J. Neitzel (eds.), *Style, Society and Persion*, New York: Plenum Press, pp. 171-258.

- Chapple, Eliot D. and Carleton S. Coon  
1942 *Principles of Anthropology*, New York: Henry Holt.
- Chippindale, Christopher  
1992 Grammars of archaeological design: a generative and geometrical approaches to the form of artifacts. In: J. Gardin and C.S. Peebles (eds.), *Representations of Archaeology*, Bloomington: Indiana University Press: pp. 251-276.
- Clarke, David L.  
1968 *Analytical Archaeology*, London: Methuen & Co.
- Cochran, Matthew D. and Mary C. Beaudry  
2006 Material culture studies and historical archaeology. In: D. Hicks and M.C. Beaudry (eds.), *The Cambridge Companion to Historical Archaeology*, Cambridge: Cambridge University Press, pp. 191-204.
- Conkey, Margaret W.  
2006 Style, design, and function. In: C. Tilley *et al.* (eds.), *Handbook of Material Culture*, Los Angeles: Sage, pp. 355-372.
- Conkey, Margaret W. and Christine A. Hastorf (eds.)  
1990 *The Uses of Style in Archaeology*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Deetz, James  
1977 *In Small things Forgotten: the Archaeology of Early American Life*, New York: Anchor Press. [1996, Second Edition.]
- Deliss, Clémentine (ed.)  
2011 *Object Atlas: Fieldwork in the Museum*, Frankfurt am Main: Weltkulturen Museum.
- DeMarrais, Elizabeth, Chris Gosden and Colin Renfrew (eds.)  
2004 *Rethinking Materiality: the Engagement of Mind with the Material World*, McDonald Institute Monographs.
- Dietler, Michael  
2010 Consumption. In: D. Hicks and M.C. Beaudry (eds.), *The Oxford Handbook of Material Culture Studies*, Oxford: Oxford University Press, pp. 209-228.
- Dietler, Michael and Ingrid Herbich.  
1998 *Habitus, techniques, style: an integrated approach to the social understanding of material culture and boundaries*. In: M. Stark (ed.), *The Archaeology of Social Boundaries*, Washington : Smithsonian Institution Press, pp. 232-263.
- Dixon, Roland B.  
1928 *The Building of Cultures*, New York: Charles Scribner's Sons.
- Dobres, Maracia-Anne  
2000 *Technology and Social Agency*, Oxford: Blackwell.
- Dobres, Maracia-Anne and John Robb (ed.)  
2000 *Agency in Archaeology*, London: Routledge.
- Dobres, Maracia-Anne and John Robb

- 2005 "Doing" agency: introductory remarks on methodology. *Journal of Archaeological Method and Theory* 12(3): 159-166.
- Dunnell, R.C.
- 1978 Style and function: A fundamental dichotomy. *American Antiquity* 43:192-202.
- Eversmann, Pauline K., R.T. Krill, E. Michael, B.A. Twiss-Garrity and T.R. Beck
- 1997 Material Culture as text: review and reform of the literacy model for interpretation. In: A.S. Martin and J.R. Garrison (eds.), *American Material Culture: The Shape of the Field*, Winterthur: Winterthur Museum, pp. 135-167.
- Fenton, William N.
- 1974 The advancement of material culture studies in modern anthropological research. In: M. Richardson (ed.), *The Human Mirror*, Baton Rouge: Louisiana State University Press, pp. 15-39.
- Ferguson, L. (ed.)
- 1977 *Historical Archaeology and the Importance of Material Things*, Columbia: Society for Historical Archaeology.
- Glassie, Henry
- 1968 *Patterns in the Material Folk Culture of the Eastern United States*, Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- 1973 The nature of the New World artifact: the instance of the dugout canoe. In: von W. Escher, T. Gantner and H. Trümpy (eds.), *Festschrift für Robert Wildhaber*, Basel: Verlag G. Krebs, pp. 153-170.
- 1975 *Folk Housing in Middle Virginia: a Structural Analysis of Historic Artifacts*, Knoxville: The University of Tennessee Press.
- ゴドリエ, モーリス
- 1986 『観念と物質 思考・経済・社会』、法政大学出版局。
- Gosden, Chris and Frances Larason
- 2007 *Knowing Things: Exploring the Collections at the Pitt Rivers Museum, 1884-1945*. Oxford: Oxford University Press.
- Gosselain, Oliver P.
- 1998 Social and technical identity in a clay crystal ball. In T. Stark (ed.), *The Archaeology of Social Boundaries*, Washington D.C.: Smithsonian Institution Press, pp. 78-106.
- 2000 Materializing identities: an African perspective. *Journal of Archaeological Method and Theory* 7(3): 187-217.
- 2001 Globalizing local pottery studies. In S. Beyries and P. Pétrequin (eds.), *Ethno-Archaeology and its Transfer*, BAR International Series 983, pp. 95-111.
- 2008 Mother Bella was not a Bella. In M. Stark *et al.* (eds.), *Cultural Transmission and Material Culture*, Tucson: University of Arizona Press, pp. 150-177.
- Gosselain, Oliver, A. Hanour, K. MacDonald and K. Manning.

- 2010 Introduction. In: A. Hanour *et al.* (eds.), *African Pottery Roulette Past and Present: Techniques, Identification and Distribution*, Oxford: Oxbow Books, pp. 1-16.
- 後藤 明
- 1997 「実践的問題解決過程としての技術——東部インドネシア・ティドレ地方の土器製作」『国立民族学博物館 研究報告』22(1): 125-187。
- 2011 「民具研究の視座としての chaîne opératoire 論から物質的関与論への展開」『国際常民研究機構年報』2: 201-218。
- 2012a 「技術人類学の画期としての1993年：フランス技術人類学のシェーン・オペラトワール論再考」『文化人類学』77(1): 41-59。
- 2012b 「過程の中の技術：アメリカにおける物質文化研究史から」『国際常民研究機構年報』3: 155-169。
- Gould, R.A. and M.B. Schiffer (eds.)
- 1981 *Modern Material Culture: the Archaeology of Us*, New York: Academic Press.
- Haddon, Alfred
- 1895 *Evolution in Art*, London: Walter and Scott.
- Hardin, Margaret, A.
- 1979 The cognitive basis of productivity in a decorative art style: Implications of an ethnographic study for archaeologists' taxonomies. In: C. Kramer (ed.), *Ethnoarchaeology: Implications for Ethnography for Archaeology*, pp.75-101. New York: Columbia University Press.
- 1983 The structure of Tarascan pottery painting. In: D.K.Washburn (ed.), *Structure and Cognition of Art*, Cambridge: Cambridge University Press, pp.8-24.
- 1984 Models of Decoration. In: S.E. Van der Leeuw and A.C. Prichard (eds.), *The Many Dimensions of Pottery*, Amsterdam: Universiteit van Amsterdam, pp. 573-614.
- Hardin, Margaret A. and Barbara J. Mills
- 2000 The social and historical context of short-term stylistic replacement: a Zuni case study. *Journal of Archaeological Method and Theory* 7(3): 139-163.
- Hawkes, C.
- 1954 Archaeological theory and method: some suggestions from the Old World. *American Anthropologist* 56(2): 155-169.
- Hicks, Dan
- 2010 Material culture studies: a reactionary view. In: D. Hicks and M.C. Beaudry (eds.), *The Cambridge Companion to Historical Archaeology*, Cambridge: Cambridge University Press. pp. 1-21.
- Hicks, Dan and Mary C. Beaudry (eds.)
- 2006 *The Cambridge Companion to Historical Archaeology*, Cambridge: Cambridge University Press.
- 2010 *The Oxford Handbook of Material Culture*, Oxford: Oxford University Press.

Hicks, Dan and Mary C. Beaudry

- 2006 Introduction: the place of historical archaeology. In: D. Hicks and M.C. Beaudry (eds.), *The Cambridge Companion to Historical Archaeology*, Cambridge: Cambridge University Press, pp. 1-9.

Hicks, Dan and Audrey Horning

- 2006 Historical archaeology and building. In: D. Hicks and M.C. Beaudry (eds.), *The Cambridge Companion to Historical Archaeology*, Cambridge: Cambridge University Press. pp. 273-292.

Hodder, Ian

- 1982a Theoretical archaeology: a reactionary view. In: I. Hodder (ed.), *Structural and Symbolic Archaeology*, Cambridge: Cambridge University Press, pp. 1-16.  
1982b *Symbols in Action: Ethnoarchaeological Studies of Material Culture*, Cambridge: University of Cambridge Press.

Hodder, Ian (ed.)

- 1982 *Structural and Symbolic Archaeology*, Cambridge: Cambridge University Press  
1989 *The Meaning of Things: Material Culture and Symbolic Expression*, London: Harper Collins Academic.

Hurt, Teresa D. and Gordon F.M. Rakita (ed.)

- 2001 *Style and Function: Conceptual Issues in Evolutionary Archaeology*, Westport: Bergin & Garvey.

Ingold, Tim

- 2011 *Being Alive: Essays on Movement, Knowledge and Description*, London: Routledge.

Jones, Michael Owens.

- 1975 *The Hand Made Object and Its Maker*, Berkeley: University of California Press.  
1980 L.A. Add-ons and Re-dos: Renovation in folk art and architectural design. In: M.G. Quimby and S.T. Swank (eds.), *Perspectives on American Folk Art*, New York: W.W. Norton, pp. 325-363.

Joyce, Rosemary A. and Jeanne Lopiparo

- 2005 Postscript: doing agency in archaeology. *Journal of Archaeological Method and Theory* 12(3): 365-374.

Kingery, David (ed.)

- 1996 *Learning from Things: Method and Theory of Material Culture Studies*, Washington: Smithsonian Institution Press.

Kirch, Patrick V.

- 1980 Polynesian prehistory: cultural adaptation in island ecosystems. *American Scientist* 68: 39-48.

Kluckhorn, C., W.W. Hill and Lucy W. Kluckhorn

- 1971 *Navaho Material Culture*, Harvard University Press: Cambridge.
- Knappett, Carl
- 2005 *Thinking Through Material Culture: An Interdisciplinary Perspective*, Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Knappett, Carl and Lambros Malafouris (eds.)
- 2008 *Material Agency: Towards a Non-Anthropocentric Approach*, New York: Springer.
- Kopytoff, I.
- 1986 The cultural biography of things: commoditization as a process. In: A. Appadurai (ed.), *The Social Life of Things*, Cambridge: Cambridge University Press, pp. 64-91.
- Kulik, Gary
- 1997 American difference revisited: the case of the American axe. In: A.S. Martin and J.R. Garriso (eds.), *American Material Culture: The Shape of the Field*, A Winterthur Book. Winterthur: The Henry Francis du Point Winterthur Museum, pp. 21-36.
- Lane-Fox A. Pitt-Rivers
- 1906 *The Evolution of Culture and Other Essays*, Oxford: The Clarendon Press.
- Lechtman, Heather
- 1977 Style in technology: some early thoughts. In: H. Lechtman and R. Merrill (eds.), *Material Culture*, St. Paul: West Publishing, pp. 3-20.
- Lechtman, H. and R. Merrill (eds.)
- 1977 *Material Culture: Styles, Organization and Dynamics of Technology*, St. Paul: West Publishing.
- Lemonnier, Pierre
- 1989 Bark capes, arrowheads and Concorde: on social representation of technology. In: I. Hodder (ed.), *The Meaning of Things: Material Culture and Symbolic Expression*, London: Harper Collins Academic, pp. 156-171.
- 1992 *Elements for an Anthropology of Technology*. Anthropological Papers 88, Museum of Anthropology at University of Michigan.
- Lemonnier, Pierre (ed.)
- 1993 *Technological Choices: Transformation in Material Cultures since the Neolithic*. London: Routledge.
- Leone, Mark P.
- 1982 Some opinions about recovering mind. *American Antiquity* 47: 742-760.
- 1984 Interpreting ideology in historical archaeology: using the rules of perspective in the William Paca Gardenn in Annapolis, Maryland. In: D. Miller and C. Tilley (eds.), *Ideology, Power and Prehistory*, Cambridge: Cambridge University Press, pp. 25-35.
- 1988 The Georgian order as the order of merchant capitalism in Annapolis,

Maryland. In: M. Leone and P.B. Potter, Jr. (eds.), *The Recovery of Meaning: Historical Archaeology in the Eastern United States*, Washinton D.C.: Smithsonian Institution Press, pp. 235-261.

Leroi-Gourhan

1993 *Gesture and Speech*, Cambridge: The MIT Press.

Lévi-Strauss, C.

1963 *Structural Anthropology*, New York: Basic Books.

1982 *The Ways of the Masks*, Seattle: University of Washington Press.

Malafouris, Lambros and Colin Renfrew (eds.)

2010 *The Cognitive Life of Things: Recasting the Boundaries of the Mind*, McDonald Institute Monographs.

Martin, Ann S. and J. Ritchie Garrison (eds.)

1997 *American Material Culture: the Shape of the Field*, Winterthur: Winterthur Museum.

Martin, Ann Smart and J. Richie Garrison

1997 Shaping the field: the multidisciplinary perspectives of material culture. In: A.S. Martin and J.R. Garrison (eds.), *American Material Culture: The Shape of the Field*, Winterthur: Winterthur Museum, pp. 1-20.

Mason, Otis

1895 *Women's Share in Primitive Cultures*, Chicago: The University of Chicago Press.

1900 *Aboriginal American Hapoons: A Study of Ethnic Distribution and Invention*, Annual Report of U.S. National Museum, 1900.

1902 *Aboriginal American Basketry: Studies in a Textile Art without Machinery*, Report of the U.S. National Museum.

McCracken, Grant

1990 *Culture and Consumption*, Bloomington: Indiana University Press.

McDaniel, G.

1978 Review of Henry Glassie 'Folk housing in middle Virginia a structural analysis of historic artifact'. *Journal of American Folklore* 91(361): 851-853.

Miller, Daniel

1987 *Material Culture and Mass Consumption*, Oxford: Blackwell.

Miller, Daniel (ed.)

1995 *Acknowledging Consumption: A Review of New Studies*, London: routledge.

1998 *Material Cultures: Why Some Things Matter*, London: UCL Press.

2005 *Materiality*, Durham: Duke University Press.

2010 *Stuff*, Cambridge: Polity Press.

Norick, Frank A.

1976 An analysis of material culture of the Trobriand Islands based upon the collection of Bronislaw Malinowski. Ph.D. dissertation for the Department of

- Anthropology, University of California, Berkeley.
- Osgood, Cornelius
- 1940 *Ingalik Material Culture*, Yale University Publications in Anthropology 22.
- 1958 *Ingalik Social Culture*, Yale University Publications in Anthropology 53.
- 1959 *Ingalik Mental Culture*, Yale University Publications in Anthropology 26.
- Oswald, Wendell, H.
- 1976 *An Analysis of Food-Getting Technology*, New York: John Wiley & Sons. (W. オズワルト『食料獲得の技術誌』、加藤晋平・禿仁志訳、1983、法政大学出版局).
- Pocius, Gerald L. (ed.)
- 1991 *Living in a Material World: Canadian and American Approaches to Material Culture*, Institute of Social and Economic Research 1991, Memorial University of Newfoundland.
- Quimby, M.G. (ed.)
- 1978 *Material Culture and the Study of American Life: A Winterthur Book*, New York: W.W. Norton.
- Quimby, M.G. and Stott T. Swank (eds.)
- 1980 *Perspectives of American Folk Art: A Winterthur Book*, New York: W.W. Norton.
- Rathje, William and Cullen Murphy
- 1992 *Rubish!: The Archaeology of Garbage*, New York: Harper Collins.
- Renfrew, Colin
- 2001 Symbol before concept: material engagement and the early development of society. In: I. Hodder (ed.), *Archaeological Theory Today*, London: Polity Press, pp. 122-140.
- 2003 *Figuring Out: the Parallel Visions of Artists and Archeologists*, London: Thames and Hudson.
- 2005 Material engagement and materialization. In: C. Renfrew and P. Bahn (eds.), *Archaeology: the Key Concepts*, London: Routledge, pp. 159-163.
- Renfrew, Colin and Ezra B.W. Zubrow (eds.)
- 1994 *The Ancient Mind: Elements of Cognitive Archaeology*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Renfrew, Colin, Chris Gosden and Elizabeth DeMarrais (eds.)
- 2004 *Substance, Memory, Display: Archaeology and Art*, McDodnald Institute Monograph.
- Reynolds, Barrier and Margaret A. Stott (eds.)
- 1987 *Material Anthropology: Contemporary Approaches to Material Culture*, Lanham: University of Press of America.
- Richardson, Miles (ed.)
- 1974 *The Human Mirror: Material and Spatial Images of Man*, Baton Rouge: Louisiana State University Press.

Sackett, J.R.

- 1982 The meaning of style in archaeology. *American Antiquity* 42: 369-380.  
1986 Isochretism and style: a clarification. *Journal of Anthropological Archaeology* 5: 266-277.

サーリンズ, マーシャル

- 1987 『人類学と文化記号論 文化と実践理性』、法政大学出版局。

Sayce, R.U.

- 1933 *Primitive Arts and Crafts*, Cambridge: Cambridge University Press. (R.U. セイス 『未開民族の文化』、坪井良平訳、1942、葦牙書房 [復刻版 1989、ビジネス書房]).

Schiffer, Michael B.

- 1976 *Behavioral Archaeology*, New York: Academic Press.  
1987 *Formation Processes of the Archaeological Record*, Albuquerque: University of New Mexico Press.  
1991 *The Portable Radio in American Life*, Tucson: The University of Arizona Press.

Schiffer, Michael B. (ed.)

- 1992 *Technological Perspectives on Behavioral Change*, Tucson: The University of Arizona Press.  
2001 *Anthropological Perspectives on Technology*, Albuquerque: University of New Mexico Press.

Schlereth, Thomas J. (ed.)

- 1982 *Material Culture Studies in America*, Nashville: The Association for State and Local History.

Schlereth, Thomas J.

- 1982 Material culture studies in America: 1876-1976. In: T. Schlereth (ed.), *Material Culture Studies in America*, Nashville: The Association for State and Local History, pp. 1-75.

Schuyler, Robert L.(ed.)

- 1980 *Archaeological Perspectives on Ethnicity in America: Afro-American and Asian American Culture History*, Farmingdale: Baywood.

Skibo, James M., William H. Walker and Axel E. Nielsen (eds.)

- 1995 *Expanding Archaeology*, Salt Lake City: University of Utah Press.

Skibo, James M. and Michael B. Schiffer

- 2008 *People and Things: A Behavioral Approaches to Material Culture*, New York: Springer.

Skibo, James, Michael W. Graves, and Miriam T. Stark (eds.)

- 2007 *Archaeological Anthropology: Perspectives on Method and Theory*, Tucson: The University of Arizona Press.

Spencer-Wood, Suzanne M. (ed.)

- 1987 *Consumer Choice in Historical Archaeology*, New York: Plenum.
- Tarlow, Sarah and Susie West (eds.)  
1999 *The Familier Past?: Archaeologies of Later Historical Britain*, London: Routledge.
- Taylor, Walter W.  
1964 *A Study of Archaeology*, American Anthropological Association, Memoir 69.
- Thomas, Nicholas  
1991 *Entangled Objects: Exchange, Material Culture, and Colonialism in the Pacific*, Cambridge: Harvard University Press.
- Tilley, Christopher (ed.)  
1990 *Reading Material Culture*, London: Routledge.
- Tilley, Christopher, W. Keane, S.Küchler, M.B. Rowlands and P. Spyer (eds.)  
2006 *Handbook of Material Culture*, Los Angeles: Sage.
- Tilley, Christopher  
2006 Introduction. In C. Tilley *et al.* (eds.), *Handbook of Material Culture*, Los Angeles: Sage, pp. 1-6.
- Tooker, Elisabeth  
1994 *Lewis H. Morgan on Iroquois Material Culture*, University of Arizona Press: Tucson.
- Trent, Robert F.  
1977 *Hearts and Crowns*, New Heaven: New Heaven Colony Historical Society.
- タイラー, E.B.  
1975 『文化人類学入門』(大社淑子他訳)、太陽社。
- Washburn, Dorothy K. (ed.)  
1983 *Structure and Cognition in Art*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Washburn, Dorothy K. and Donald W. Crowe  
1988 *Symmetries of Culture: Theory and Practice of Plane Pattern Analysis*, Seattle: University of Washington Press.
- West, Susie  
1999 Introduction. In: S. Tarlow and S. West (eds.), 1999 *The Familier Past?: Archaeologies of Later Historical Britain*, London: Routledge, pp. 1-15.
- Wiessner, Polly  
1983 Style and social information in Kalahari San projectile points. *American Antiquity* 48:253-276.  
1984 Reconsidering the behavioral basis for style: a case study among the Kalahari San. *Journal of Anthropological Archaeology* 3:190-234.  
1989 Style and changing relations between the individual and society. In: I. Hodder (ed.), *The Meaning of Things: Material Culture and Symbolic Expression*, London: Harper Collins Academic, pp. 56-63.
- Wilkie, Laurie A.

Research Papers of the Anthropological Institute Vol.1 (2013)

2006 Documentary archaeology. In: D. Hicks and M.C. Beaudry (eds.), *The Cambridge Companion to Historical Archaeology*, Cambridge: Cambridge University Press, pp. 13-33.

Wissler, Clark

1926 *The Relation of Nature to Man in Aboriginal America*, New York: Oxford University Press.

Yentsch, A. and M. Beaudry

2001 American material culture in mind, thought and deed. In: I. Hodder (ed.), *Archaeological Theory Today*, Cambridge: Polity Press, pp. 214-240.